蓬莱の玉の枝③

御文、不死の薬の壺並べて、

火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。そのよしうけたまはりて、

士ども（つはもの）あまた具して山へ登りけるよりなむ、

その山を「ふじの山」と名づけける。

その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。

現代語訳

（帝は）お手紙と、不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすようにと、

ご命令になった。その旨を承って、

（使者が）兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったということから、

その山を「士に富む山」、つまり）「ふじの山」と名付けたのである。

その煙は、いまだに雲の中へ立ち上っていると、言い伝えられている。

あまた→たくさん

具して→ひきつれて

たくさんの兵士を引き連れる→士に富む山→富士山